

『加沢記』からみた真田氏の自立

— 外交政策・家臣統制を中心に —

富澤 一 弘 ・ 佐藤 雄 太

The Independence of Sanada Clan during Sengoku-Era in *kazawaki*

Tomizawa Kazuhiro · Sato Yuta

序 章

第1節 研究の動機

筆者らは、戦国時代の上野国について『加沢記』を中心史料として、真田氏の上野国侵攻や上野国の諸將の動向を研究している。これまでは戦国時代に沼田地方を支配した沼田氏について研究を行なった(註1)。

本論文では真田氏の独立期の様子を見ていく。この時期は上杉氏の家督争い、真田氏の後ろ盾であった甲斐武田氏の滅亡、本能寺の変、秀吉と家康の対立など多くの出来事があり、混迷をきわめていた。このなかで真田氏は戦国大名として独立を果たしたが、大名としての地位を確立するためには家中の統制、在地の支配など多くの選択や困難があり、このときの動向を『加沢記』を中心史料として検討していく。

【註】

- (1) 富澤一弘・佐藤雄太「『加沢記』からみた戦国時代沼田地方の政治情勢」(『高崎経済大学論集』第54巻第2号、平成23年9月 1-16頁)

第2節 『加沢記』について

(1) 『加沢記』の概要

『加沢記』は、沼田真田藩の家臣であった加沢平次左衛門によって著されたもので、後にその姓によって付された書名である。

この手記は、上野国吾妻・利根両郡を支配した信濃国の滋野源氏の系統である真田氏を中心として、戦国時代初期より勢威を盛り立てた真田弾正忠幸隆より始まり、戦乱のなか、成長していった過程を記したものである。これと平行して真田氏が、甲斐武田氏の上野侵攻の先方衆として、同族

で土着者の多かった吾妻郡西部に入り、侵攻する中で吾妻郡の地衆の歴史や、動向、そして後に真田氏が支配することとなる、沼田地方の地衆の中心的存在であった沼田氏や、白井城を支配していた白井長尾氏などの記述も詳しい。

『加沢記』の信憑性は、引用した宛行状、安堵状、感状の記載によっても窺える。幸いにもその中の何点かは現存しており、比較対照できるものもある。須川の森下文書、孀恋村西窪文書などもその一例である。さらに戦記とは別に、原町善導寺や、川場村吉祥寺の歴史、白井長尾氏の記述、花咲村の歴史、子持山縁起なども記されている。平次左衛門は平和を取り戻した江戸時代初期の末から中期にかけて生きていたので、実際戦場の経験はなかったはずである。おそらく若くして戦国を生きた昔を知る老人の話聞き、史料を集め、実際に歩いての調査を行なった上で執筆したと考えられる（註1）。

現在残されているものは、天文10年（1541）、海野氏と村上義清との戦いから天正18年（1590）、豊臣秀吉の小田原攻めまで49年間の歴史が記され、真田幸隆・昌幸・信幸（信之）の3代の活躍とそれらを軸として利根・吾妻の地衆の興亡が描かれている。

【註】

- (1) 『沼田市史』資料編1 別冊『加沢記・沼田根元記』（沼田市、平成7年3月） 4頁
- (2) 本項は断りのない限り『加沢記・沼田根元記』を参考とした。

第1章 武田氏滅亡前の真田氏

第1節 この時期の真田氏の状況

天正8年（1580）、真田氏は沼田城を攻略したことで、沼田地方は武田氏の支配下になり、厩橋城の上杉方であった北条高広も武田方についていた。しかし、後北条方の進出により、これ以上攻め込むことはできず、武田氏の上野国支配は全域には及ばなかった。

翌年10月上旬、後北条氏の上野侵攻を担当していた北条氏邦は、「其頃北条安房守氏邦出張し玉いて、猪俣能登守先かけにて倉内を被責ければ」（註1）と沼田城の支城である長井坂城を攻め落している。これに続いて後北条方は「猪俣能登守先かけにて倉内を被責けれ」と猪俣邦憲を中心として攻撃の手を緩めず、森下・阿曾城などを攻め落とした。

第2節 真田氏と海野兄弟の対立

後北条氏優勢の状況下で同年の11月、吾妻地方の武士の中で代表格であり、真田氏と同族でもあった海野兄弟が、真田昌幸に討伐されるという事件が起こっている。

海野兄弟と真田昌幸が対立した理由は、吾妻郡の支配を彼らに任せるという約束に反して、昌幸が吾妻の武士の何人かを家臣とし、それを海野兄弟が不満としたことによる。

真田昌幸は、先年約束した通り吾妻を海野幸光に渡したが、吾妻郡内の武士のうち鎌原・湯本・植栗・池田・浦野・西窪・横谷という有力者7人は除かれていた。

【史料1】

（前略）吾妻一郡は兄弟へ御渡し有んと昌幸卿御やくそく有しに、吾妻郡の内所々を給人に恩附せられければ、兄弟無覚束被思、昌幸卿へ佐藤豊後、渡利常陸介、兩人を使者にして被申けるは、郡内士卒恩賞の儀、向後我等兄弟の計に可仕と申されければ、昌幸卿御返答に、尤先年約諾申ごとく、貴方へ可相渡処相違なし、然ども鎌原、湯本、植栗、池田、浦野、西久保、横谷七人は除、其外は不残御被官たるべし、勿論恩賞の事も御斗たるべしと御返事有り（以下略）

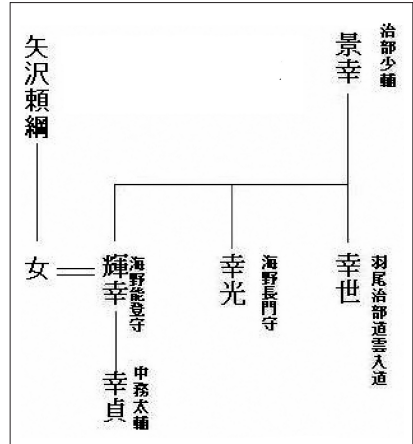


図1 羽尾氏略系図
『加沢記』より作成

『沼田市史』資料編1別冊『加沢記・沼田根元記』（沼田市、平成7年3月） 120頁

鎌原ら7人の武士は、真田氏と同族か、真田氏の上野侵攻に従って功績を上げた者たちであり（註1）、海野幸光の不満は、吾妻地方の武士たちの中核である彼等を、海野氏の家臣とすることから除外したことにある。これにより、海野幸光は期待した恩賞を得られず、昌幸に対抗する勢力を得ることができなかった。

また、海野兄弟は海野氏を名乗る真田家の本家筋であり、家格的には上である自分達を軽視したことに対して大きな不満、反発を抱くことになった。

そして、11月上旬、海野兄弟に謀叛の企みがあるという報告がなされた。真田昌幸は輝幸の義父でもある矢沢頼綱と密かに相談、早々に誅罰することに決定し、主君武田勝頼の命令を得て、討手を差し向けることにした。

【史料2】

（前略）六（七）人を不被附事難心意とて、逆心の企顕然たる旨、彼の七人の加判にて湯本鎌原所より、同年十一月月上旬に忠（注）進有りければ昌幸卿驚玉て、頼綱卿に御密談有りける（以下略）
前掲『加沢記・沼田根元記』 120頁

真田昌幸の討伐により、吾妻地方を代表する有力武将であった海野幸光、輝幸兄弟の勢力は没落し、吾妻・利根両郡における真田氏の支配力はより強化される結果となった。さらに海野兄弟を討ったことで、真田家は海野一族のなかでの権力を高めることにもなり、同族を支配する上でも重要なことであったといえる。

【註】

(1) 前掲『加沢記・沼田根元記』 120頁

第2章 甲斐武田氏の滅亡と本能寺の変による混乱

第1節 武田氏の滅亡と真田氏の自立

天正10年（1582）3月、織田信長は武田氏より離反した木曾氏に支援のため援軍を送り、そのまま武田領内へ侵攻した。後北条氏も織田・徳川軍に呼応し、武田領に侵攻を開始した。その様子を『加沢記』でみる。

【史料3】

（前略）廿日一札、今廿二未刻、到來、信州表之儀者、自是も京説申入候キ、可為參着候、去十九到來候間、廿日より諸口へ陣觸、五日之内外、皆可懸集候、動之筋者、于今無落着候、甲州之是非與覚悟候間、只今取出など之儀者、一切不覺悟候、何與御分別候哉、信州之平地へ大軍押し出候者、何共防戦之模様甲州成間敷候（以下略）

杉山博・下山治久編『戦國遺文』後北条氏編3巻（東京堂出版、平成3年9月） 170頁

これ以前にも、武田氏の有力親類衆で、駿府にいた穴山梅雪が徳川方についており、これに従って武田方を去るものが続出していた。家臣団は武田氏を離れ、織田氏の侵攻に対してだけでなく、内部的にも非常に危険な状況であった。

『加沢記』では武田家中で評定が開かれた際、真田昌幸は「諸方御敵に成ければ甲州へ御帰陣も無覚東御事也ければ某の領知上州吾妻郡岩櫃の城へ御入有べし」（註1）と、当主勝頼に上野国岩櫃城に退くことを提案した。そして一同の同意を得た後、岩櫃城に準備のため、急ぎ入城した。

しかし、織田軍の進撃は早く、勝頼は本拠新府城を捨てて、郡内（山梨県都留郡）の小山田信茂の岩殿城へ向かったが、小山田氏に背かれて城に入れず、同年3月11日、武田勝頼父子は天目山の麓で自害し、武田氏は滅亡することになった。

この時期、真田昌幸は上述したように、吾妻の岩櫃城で勝頼父子を待っていたと考えられる。しかし、他の史料をみると、それに反して、すでに後北条氏への臣属を打診していたようであり、武田氏滅亡翌日の日付の書状が後北条方から届けられている。

【史料4】

[正村政規氏所蔵文書] ○上田市新参町

雖未申通候、啓達候、仍八崎長尾入道江両度之御状披見、紙上之趣誠簡要至極候、今度甲府御仕合無是非候、然に氏直各御譜代之筋目付而、箕輪之各和田先忠被成候、貴所江も自箕輪可有意見

由候ツル間、如何ニモ最之段令返答候、然處八崎江御状共令披見候間、此度申入候、氏直江御忠信此時相極候、恐々謹言、

三月十二日

安房守

氏邦（花押）

真田殿

御宿所

信濃史料刊行會『信濃史料』第14巻（信濃史料刊行會、昭和34年12月） 154頁

この文書によると真田氏の後北条氏服属は、武田氏に属していたことのある八崎城の白井長尾憲景を介して行なわれていたことがわかる。真田氏はこの混乱期を生き抜くために、あらゆる手段を講じていたことがわかる。

真田昌幸はこれ以降、独自に領知宛行状などを発行し、武田氏より独立していく（註2）。

【註】

- (1) 前掲『加沢記・沼田根元記』 128頁
- (2) 前掲『信濃史料』第14巻 235頁

第2節 織田氏による上信支配と真田氏

この節では、『加沢記』において真田氏が武田氏滅亡後、どのような外交方針をとったかをみていく。天正10年（1582）3月15日、真田昌幸は矢沢等とともに信濃国高遠に在陣していた織田信長の長男信忠に出仕し、人質を差し出している。

【史料5】

（前略）昌幸公の始（ママ）矢沢、祢津、芦田、室賀、三月十五日高遠へ出仕し給て人質を被出ける、昌幸公も御娘子を、被渡ける、人々本領安堵無相違の旨、追而信長公の御證文可進とて信忠公何れもへ御盃を賜り帰城せられ嚴重の御儀式也（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 135頁

武田氏滅亡の後、武田氏の領国のうち、甲斐・信濃・上野の3国を織田信長が接収することになった。信長は家臣の滝川一益を関東管領に任命し、上野一国と信濃国のうち小県・佐久郡を与えている。

上野国に入った滝川一益は、1万の兵を率いて3月19日箕輪城に入城し、5月下旬には厩橋城に移った。滝川氏のの上野国支配は、滝川一益が厩橋城に在城し、甥の滝川儀太夫が沼田城代として入城している。しかし、この滝川一益による関東支配は織田信長の死により、すぐに崩壊すること

になる。

天正10年(1582)6月2日、天下統一を目前にしていた織田信長が本能寺の変により没し、関東にいた滝川一益は同月7日にそれを知った。そして同年6月18日、上野国に侵攻してきた後北条氏と滝川一益との間に戦いが行われ(神流川合戦)、敗れた滝川軍は撤退することになった。

『沼田市史』ではこの際、真田氏ら上野国の諸将は滝川一益が織田信長の死を知らせ、人質を返したことに感動し、滝川一益に従って後北条氏と戦った説話を「滝川一益事書」に基づき載せている。『加沢記』でも真田氏は同様の理由で滝川一益に従っている。しかし実際には北条高広など限られた人物にのみ、信長横死を知らせていた(註1)。

織田氏による信濃・上野国支配は約3カ月で崩壊し、この後上野国は後北条氏、信濃国には徳川氏、越後国からは上杉景勝が侵攻することになり、真田氏はその板ばさみとなる苦境に立たされた。

【註】

- (1) 沼田市史編さん委員会『沼田市史』通史編I原始古代・中世(沼田市、平成12年3月)
604頁

第3節 徳川家康の信濃国進軍と神川合戦

神流川合戦の後、真田氏は一時後北条氏に仕えていたが(註1)、天正11年(1583)秋、徳川家康が信濃国に出陣すると、信濃国の諸士はほとんどが家康に出仕し、真田昌幸もこれに従った。

しかし『加沢記』では、滝川氏の撤退後、後北条氏に属することなく、徳川氏のもとに赴いている。

また、同時に臣属した者には一族の祢津宮内大輔もいたが、真田昌幸の下に帰属したわけではなく、徳川氏から独自に本領を安堵されたため、真田氏の完全な支配下とならなかった。

【史料6】

右年来被抱置知行之分、如前々領掌之上者、永不可有相違、弥以此上者、可被存忠功候者也、仍如件

天正十一年九月二十八日

家康公 御在判

祢津宮内太輔殿

前掲『加沢記・沼田根元記』 157頁

この状況下で真田昌幸は同年10月、小県郡の統一のため室賀氏の館を攻めたが、この時は室賀氏から「和免」を請われ、和談となっている。

そして翌天正12年6月、室賀氏は徳川家康から真田討滅を命じられた。しかし、これは真田昌

幸の知るところとなり、昌幸は室賀信俊を謀殺した（註2）。

真田昌幸の室賀信俊謀殺により徳川氏は翌天正13年閏8月、真田氏を攻めるが、真田昌幸は農民を大量に動員、また女や子どもまでも動員し「石つふて」を投げさせるなど、激しく抵抗した様子が『加沢記』で見られる。

【史料7】

（前略）家康公被仰出けるは、信州一国令平均皆々遂出仕処に、今度真田以表裏室賀討たる事、逆心の至、専叛逆の頭人也、急速真田か一門御退治有んとて（中略）昌幸卿此由を聞玉いて御一門御会合有て今度は一門ふちん此時に極れり、以表裏可戦と、先勢を見んとて着到を被注けるに、（中略）敵寄手は七千余騎、四分一の人数なり、（中略）城地二里四方の濃（農）民共籠城しければ彼等を集めて男女共に三千余人、百姓の妻女わらんへには石つふてを打たせられたり、（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 159頁

また、この防戦には7月15日に同盟した上杉景勝の援軍も期待できた。この状況下で真田昌幸は同年10月、豊臣秀吉に接近し、秀吉の取り成しにより、徳川氏との戦いを終結させることに成功する。

【史料8】

（前略）昌幸卿不叶とて上田の城に信幸卿を残し置まいらせ、（中略）上洛し玉いて秀吉公に属相頼旨石田治部少輔、増田右衛門尉を以被申上ければ、神妙也とて上方に御藏出し三万石拝領被成、ふしみにこそ在城なりけり、家康公此由被聞召て房州を落したる事無念に被思召けり、（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 162頁

【史料9】

[羽柴秀吉書状] 長野県 真田家文書

「真田安房守殿」

未申遣候処、道茂所へ之書状披見候、委細段被聞召届候、其方進退之儀、何之道ニも不迷惑様ニ可申付候間、可心易候、小笠原右近大夫与弥申談、無越度様ニ其覚悟尤候、猶道茂可申候也、

拾月十七日

(羽柴秀吉)
(花押)

真田安房守とのへ

沼田市史編さん委員会『沼田市史』資料編I 原始古代・中世（沼田市、平成7年3月）747頁

真田氏は秀吉への接近によって、上田から吾妻地方にかけての支配者として秀吉に認められるこ

とになり、一族である祢津、矢沢、鞠子等を真田家臣とすることができた。

これ以後、真田氏は勢力を増し、戦国大名として成長していくことになる。

【註】

(1) 前掲『沼田市史』通史編2 608頁

(2) 前掲『加沢記・沼田根元記』 158頁

第4節 豊臣秀吉の真田氏の利用と真田氏の家康への再出仕

天正14年(1586)7月、家康は再び、真田昌幸討伐のため出陣したが、これは豊臣秀吉により、すぐに止めさせられた。なお、同年秀吉は妹を家康に嫁がせ、さらに生母を人質として家康に送っており、家康の懐柔に成功している。そのため、秀吉の真田氏に対する徳川氏への対抗勢力としての価値が変化したことにより、態度の転換が見られ、昌幸は「表裏比興者」などと称されている。

これ以降、真田氏の存在は秀吉にとって、家康に対する外交のために利用されることになっていく。

まず、秀吉は真田氏を討たせることで、家康の歓心を得ようと画策した。しかし、家康を懐柔させた後は、徳川軍を撃退した真田氏を家康の下に置くことで、家康に恩を売り、かつ真田氏を家康の監視役とする狙いがあったと考えられる。

天正15年3月18日、真田昌幸はこのような状況下で、上杉景勝から徳川家康に出仕し、再び徳川家康に臣属することになった。

【史料10】

(前略) 家康上洛候て令入魂、何様にも關白殿次第与申候間、別而不殘親疎、關東之儀、家康と令談合、諸事相任之由、被仰出候間、被得其意、可心易候、眞田・小笠原・木曾兩三人儀も、先度其方上洛之刻、如申合候、徳川所へ可返置由、被仰候、然者、眞田儀、可討果ニ相定候といへとも、其方日比申談られ候間、眞田を立置、知行不相違様ニ被仰定、家康ニ可召出之由、被仰聞候、眞田儀、条々不屈段、先度被相越候時、(中略)

十一月四日

(秀吉)(花押)

上杉少将とのへ

信濃史料刊行會『信濃史料』第16巻(信濃史料刊行會、昭和36年3月) 456頁

『加沢記』においては、この時期の記述はなく、また真田氏が上杉氏と同盟、もしくは服属していた記述はみられない。真田氏が豊臣方として独力で徳川氏を退け、その後徳川氏に出仕する豊臣系の大名のように書かれている。おそらく真田氏が上杉氏を裏切る形となってしまったため、憚って記述

できなかったと思われる。また、加沢平次左衛門が当時の上杉氏との同盟を知らなかったとも考えられるが、その場合、豊臣氏から徳川氏への出仕の経緯が書かれないのは不自然であるだろう。

第3章 真田氏独立後の上野国の状況

第1節 真田氏の白井長尾氏攻め

前章までは、本能寺後の真田氏の信濃国方面の情勢をみてきた。ここからは、後北条氏と争った上野国の情勢をみていく。

『加沢記』によると天正10年（1582）6月、真田氏は白井長尾氏の拠点である猫・津久田（渋川市赤城町）両城を攻めた。その軍は「本備金子美濃守、恩田越前守、下沼田豊前守、発知左衛門五郎、中山左衛門尉、武者奉行塚本肥前守、高橋右馬允、都合千余騎」（註1）と沼田の諸将が主であった。

しかし、上白井からの援軍などのため、真田方は不利となり、中山右衛門尉は討死、沼田勢150余人が討取られ、50人が生け捕り後、断罪となった。

【史料11】

（前略）沼田勢百五十余人被討、五十人被生捕けるか、（中略）長尾左衛門尉は矢野山城守に下知し玉ふて生捕五十人科野の川原へ引出断罪にそせられける（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 143頁

これにより真田氏の上野国侵略は一時後退することになり、上野国諸将は後北条氏からの調略を受けることに繋がる。

【註】

（1）前掲『加沢記・沼田根元記』 142頁

第2節 後北条氏の上野国侵攻と白井長尾氏の衰退・大戸城攻略

前述の合戦で中山城主、中山右衛門尉が討死したため、中山城は後北条氏の支配下となった。そして勢力を伸ばした後北条氏のもとに「沼田地衆」・「川田地衆」54人が連判状を提出している。その理由として、後北条氏の侵攻に自家存続の危険を感じたことはもちろん、赤見氏がその仲介を行なったことも大きな理由である。

【史料12】

（前略）中山右衛門尉討死しければ白井長尾の幕下赤見山城守氏直卿下知にて相移けり、右衛門弟

九兵衛尉相戦けるか、家人共皆敵方へ心を寄たり（と）申しければ早々城を明退き候へと矢沢下知せられければ城を明渡し（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 143-144頁

赤見氏には沼田顕泰の次男綱泰が養子として入っており、顕泰が後北条氏と沼田地衆との間を取り持ったのである。

赤見氏はこの活動により、後北条氏から信用を得ることとなった。その一方、以前よりのこの地方の実力者であった白井長尾氏は権力を失っていった。

【史料13】

（前略）一井斎不道故連候領地も取をくれ、幕下の士にも疎まれ、今度中山城へ家臣赤見を被居けるにも氏直卿の證文赤見直に頂戴しければ長尾の家も十一代にして滅亡無疑と矢沢頼綱人々に被申たり（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 144頁

さらに後北条氏は攻撃の手を緩めず、9月下旬には大戸氏の守る手子丸城を攻め取っている（註1）。

こうして、後北条氏は岩櫃城へと迫っていったが、真田信幸が防備体制の固まる前に手子丸城（東吾妻町大戸）へ反撃し、落城させた（註2）。また10月以降は長井坂（渋川市赤城町）・阿曾の要害（利根郡昭和村糸井）、鎌田城（利根郡昭和村字大字森下）等を巡り、真田氏と後北条氏との間で激しい合戦が繰り広げられた。

天正10年10月28日、北条氏邦は沼田地方に攻め込んだ。『加沢記』では「五千余騎」、「先手に鉄炮五十挺」（註3）とそれまでより大軍であり、本格的に攻めようとしたことがわかる。しかし、真田方の守りは堅く、また夜襲により後北条方は敗北し、一時撤退することになった。

【史料14】

（前略）猪股（ママ）ほうほう躰にて引退く、金子、渡辺続て追かけ、百余人討取、かち時を作り為合五百余討捕、其夜の内に町り（ママ）川原にかけ置たり（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 153頁

しかし、これ以降後北条氏は力攻めを控え、調略に重点を置くことになる。

【註】

（1）前掲『加沢記・沼田根元記』 145頁

（2）前掲『加沢記・沼田根元記』 147頁

(3) 前掲『加沢記・沼田根元記』 151頁

第3節 上野諸将の後北条方への離反

前述のように、真田氏と後北条氏は上野国を巡り激しく争った。この際、沼田地方の地衆の多くが後北条方につくことになった。

【史料15】

(前略) 一、天正十年十月大合戦有りければ、昌幸卿も倉内へ御馬を被寄たりける、かかりける処に、川田地衆悉く氏直卿へ忠節して中山へと引退たりと祢津の家臣小林文右衛門書付を以て助右衛門尉え注進したりけり、

覚 下川田衆

星野三右衛門、田中源之允、鈴木市之丞、今井源介、苗木四郎太郎、石上与十郎、平井新右衛門、同加兵衛、同弥藤五郎、深津戦之丞、苗木新五郎、以下二十人

上川田衆

武井藤右衛門、大竹六郎左衛門、渡(カ)部新五郎、大竹与惣左衛門、同五郎左衛門、同新右衛門、藤塚甚三郎、同市之丞、大竹弥兵衛、鈴木右馬介、佐目貝与兵衛、以下十一人
都合二十三人今月二十九(カ)日引退き、中山赤見山城守に属したり、(以下略)

前掲『加沢記・沼田根元記』 154頁

この理由は、真田昌幸が前述の室賀氏との対立などで信濃国の領国内の問題に追われていたからである。さらに、上杉氏・後北条氏の信濃侵攻に加えて、有力家臣で海野氏としての家格は真田氏より上である祢津氏が、真田氏が徳川氏に臣属した直後に後北条氏に属し、真田氏と対立したことがある。

表1 後北条方に属した沼田の地衆

| | |
|------|--|
| 中山地衆 | 平方丹波守、同作右衛門、飯塚弥兵衛、飯塚弥右衛門、林与十郎、平方玄蕃、小林新五郎、平方新右衛門、小林右近、平方作右衛門、同五郎太郎、九郎五郎、弥五郎、平方七郎右衛門、唐沢半右衛門、養田市助 |
| 沼田浪人 | 榊田隼人、佐藤勘(甚カ)左衛門、小保方源之丞、大淵与右衛門、小暮早助、小保方源左衛門 |
| 須川衆 | 神保太郎助、同八郎右衛門、奈良左近、宝蔵坊 |
| 下川田衆 | 星野三右衛門、田中源之允、鈴木市之丞、今井源介、苗木四郎太郎、石上与十郎、平井新右衛門、同加兵衛、同弥藤五郎、深津戦之丞、苗木新五郎 |
| 上川田衆 | 武井藤右衛門、大竹六郎左衛門、渡(カ)部新五郎、大竹与惣左衛門、同五郎左衛門、同新右衛門、藤塚甚三郎、同市之丞、大竹弥兵衛、鈴木右馬介、佐目貝与兵衛 |

『加沢記』154頁より作成

【史料16】

北條家朱印状○禰津文書

「禰津宮内太輔殿」

知行方

一、千貫文 手塚

一、式千七百貫文 清野一跡

以上

右、望進置候、彌可被抽忠信者也、仍如件、

天正十年壬午

十月三日

安房守奉之

禰津宮内太輔殿

前掲『戦国遺文』後北条氏編3巻 206頁

この対立により昌幸は小県郡を離れられず、上野国には叔父矢沢頼綱を沼田城、嫡子信幸を岩櫃城に派遣し、分割統治を行うことになった。

第4節 天正13年の後北条氏の沼田侵攻

真田氏が天正13年から翌年まで徳川氏と交戦していた際、後北条氏もこれに乗じて真田領へと侵攻している。このとき、後北条氏は徳川氏と同盟しており、両氏の間で沼田領は後北条領とされたが、真田氏はこれを自らの力により獲得した領地と主張し、領有を認めなかった。そのため、沼田領は徳川氏と後北条氏の交渉で後北条氏の「手柄次第」と決められ、後北条氏の侵攻を受けることになる。

【史料17】

(前略) 天正十三年酉の九月、氏直沼田へ出勢し玉いけるらんせうを尋るに、織田信長公御生涯の刻家康公と氏政御兵談有て、甲信両国は家康公、上州は北条殿相互手柄次第御仕置可被遊御約たくなりける (以下略)

前掲『加沢記・沼田根元記』 166頁

天正13年(1585)8月末、本拠地上田で徳川方と交戦中であった真田氏の間隙をつき、後北条氏の大軍が上野国の沼田城へと侵攻してきた。

この際、交戦中であった上田から沼田へと大規模な援軍を送ることは不可能であり、上杉家臣の直江兼続を介して上杉景勝に援軍を要請していることから、当時真田氏は、上杉氏に頼るところが大きかったことが『加沢記』以外の史料からわかる。

【史料18】

[矢澤文書] ○埴科郡松代町 矢澤頼忠氏所蔵

對直江書面之趣披見、仍而當表備逐日任素意之条、可心安候、次息三十郎參陣、別而走廻候間、喜悅候、雖不及申、歸馬之内、其元弥堅固之用心專一候、謹言、

（天正十四年）九月五日

景勝（花押）

矢澤薩摩守殿

前掲『信濃史料』第16巻 368頁

このときの後北条軍の編成は『加沢記』からみると、倉賀野、南牧、西牧、桐生など主に東毛の諸将が後北条方に属している（註1）。

この後北条氏の沼田侵攻は、上杉方の加勢もあり、真田方が撃退に成功した。

【註】

（1）杉山博・下山治久編『戦国遺文』後北条氏編4巻（東京堂出版、平成4年9月）166頁

第5節 天正14年の後北条氏上野侵攻

天正14年（1586）4月下旬にも後北条氏は「氏直卿は天正14年酉4月下旬に前橋へ着陣有る」と当主氏直も沼田へ侵攻した。

【史料19】

北条氏直書状○東京大學史料編纂所所蔵猪俣文書

今度計策仙人ヶ岩屋乗捕儀、誠無比類走廻、感悦不少候、彌無油斷、仕置專一候、謹言、

卯月廿五日

氏直（花押）

猪俣能登守殿

前掲『戦国遺文』後北条氏編4巻 105頁

この軍勢は氏直が出陣していることから分かるように、前年より本格的な攻撃が行なわれ、多くの将が参陣している。上野国の諸将も真田方である沼田、吾妻地方を除き、多くの武士が参戦している【表2】。

後北条氏の本軍は5月末に撤退するが、阿曾の要害に猪俣邦憲を置き、以後も真田氏との戦いが行なわれることになる。

表2 天正14年4月末、後北条氏の上野侵攻の陣容

| | |
|----|---|
| 一門 | 北条美濃守、同陸奥守氏明*、同安房守氏邦 |
| 譜代 | 松田尾張入道、同左馬助、遠山豊前守、大道寺駿河守、同孫九郎、多目周防守、ゆうぎ、石巻下野守、塀賀伯耆守、佐倉筑後守、遠山右衛門、千葉、小山、宇都宮、岩松、かさい、川越、松田、川村、熊谷、白倉、深谷、太田安徳斎、難波田、依田大膳、南条山城、由良信濃守新五、同新六、佐野修理大夫、成田下総守、遠田豊前守、山同上野之介、□□伊賀守、松田肥後守、大森甲斐守、高山遠江守、倉賀野淡路守、伊勢備中守、清水太郎左衛門、同治部正、南条山城守、同右馬之助、内藤大和守、半田筑後守、小幡上総介、大藤左衛門、立林喜三次、高井主膳、安中越前入道、矢部大膳、石倉、八木原、本庄、大場の太郎、岡部弥次郎、中山主膳、荒川豊前守、上田常陸介、猪俣能登、南条、桐生、阿久沢、茂手木、長谷川、村岡、しよ戸、那須の一党、山上、大胡、垂の隼人 |

『加沢記』173,4より作成

第6節 五覧田合戦

沼田城には前述した通り真田昌幸の叔父矢沢頼綱が在城していたが、天正14年（1586）9月下旬、後北条方である桐生の阿久沢左馬介が真田方の五覧田城（みどり市）を攻め落としている。

この原因として、阿曾の要害に猪俣邦憲が在城していたため、援軍を送れなかったことなどが『加沢記』では述べられている。

【史料20】

（前略）此は天正十四年九月下旬に左馬之助、出勢して五乱田の城を取まき責けるごとに、其頃あその用害に猪俣在城して倉内と相戦半なりければ加勢ならず、阿久沢多勢を以責けるほとに、不叶して用害を明退けれか由良殿分の検使高（鳥カ）山、小野、すきまもなく追かけ、わたるせにて大将久屋被討ければ（中略）其ことごとく五乱田わたらせにてはなやかに討死す（以下略）
前掲『加沢記・沼田根元記』 177-178頁

しかし、他の史料によると、天正12年に後北条方によって、五覧田城は攻め落とされている。

【史料21】

北條氏直感状 ○前原文書

「前原藤左衛門□」

去三日、五覧田之地乗取砌、敵一人目 織部丞與合討、高名之至 妙候、彌可走廻者也、

（天正十二年）七月十一日

（花押）

前原藤左衛門殿

前掲『戦国遺文』後北条氏編4巻 22頁

このときは本能寺の変の後、由良氏が自立を目指し、後北条氏と対立したため、後北条氏によって攻め落されたのであり、天正12年以降の後北条・徳川両氏と同時に対立している苦しい状況下にあった真田氏がそのなかで奪取したとは考えにくい。

『加沢記』におけるこの部分は真偽が疑わしいが、後北条方の侵攻により、真田方は甚大な被害を受けていた事が想像できる。

さらに天正15年2月中旬、猪俣・由良等が沼田城に攻め寄せており、後北条氏は連年、沼田に攻め込み、真田方は防戦を強いられている様子が見られる。

【史料22】

（前略）一、天正十五年二月中旬、由良信濃守大将にて阿久沢左馬助、茂手木弾正忠先手として、長尾新五郎、大胡、石橋、羽根川、矢羽の一族、其勢都合五千余騎、赤城山をへて白井野の原に着陣して、猪俣と一所に成て沼田を責んとはかりけり、（以下略）

前掲『加沢記・沼田根元記』 179-184頁

この部分は年月日について矛盾が多く、その点では信憑性が低いが、内容に関しては、徳川氏のため、真田昌幸が本領に釘付けされるといった状況により、上野国での真田氏は厳しい情勢であったことを窺うことができる。

この時期の地衆は状況が変わるごとに所属を変えた。特に後北条氏の中山城攻略後の沼田地衆は赤見氏の仲介があったとはいえ、顕著であった。また、真田氏と対立した祢津氏のように、自らの権力を強めるため、後ろ盾となる勢力を選択する場合もあった。

真田氏はこの混乱の中で、室賀氏の討伐や有力な一族を服属させるなど家中の統一を行い、徳川家康などの諸勢力から自領を守る力をつけていった。

終 章

第1節 真田氏が北信濃・北上野支配を確立できた理由

ここまで『加沢記』を用いて、真田氏が戦国大名としての地位を確立するまでを見てきた。ここでは、その要因をいくつか検討していく。

真田氏が戦国大名として自立できた大きな要因として家臣団の統一、特に同族家臣を支配下に置いたことが挙げられる。家格としては同様かそれ以上であった海野兄弟の討伐や祢津氏・室賀氏の支配は真田氏を海野氏棟梁としての位置を高めさせた。このことは信濃国北部から上野国吾妻まで広がる同族を支配する上で大きな効力を持っていたと思われる。

また上野国においての重要地であった沼田の支配についてもみえる。真田氏は沼田城には昌幸の叔父である矢沢頼綱、後には嫡男信幸といった有力一門を置き支配を行なっている。その際には、

この地の有力者であった金子美濃守を中枢から遠ざけるなど支配の一元化に成功していたと考えられる（註1）。

これは上杉氏の支配と対照的で、上杉氏は足利義昭家臣であった上野家成、近江国出身の河田重親など出自の異なる多くの城番を沼田に置いた。また『加沢記』では金子美濃守を「奉行」とするなど在地の者も中枢に参加させたため、城番同士の争いが多く、自分の意見を通すために後北条氏や武田氏に鞍替えしようと脅す様子が描かれている（註2）。そして最終的には上杉氏の跡継ぎ争いの御館の乱時には分裂し、沼田は後北条氏のものとなっている。

真田氏と上杉氏の沼田支配を単純に比較することはできないであろうが、武田氏滅亡後から豊臣秀吉の介入までの間、信濃方面での徳川家康や室賀氏との対立の中で、沼田を保持できたことは当主昌幸の代わりの務まる有力一門を置いたことが大きかったと思われる。

【註】

- (1) 前掲『『加沢記』からみた戦国時代沼田地方の政治情勢』 14頁
- (2) 前掲『加沢記・沼田根元記』 83頁

第2節 今後の課題

この時期は真田氏が戦国大名として独立した時期であり、その背景には武田氏の滅亡から始まる上野国外の勢力の干渉による混乱があった。上野国は真田・後北条・上杉氏などによって争われることになり、さらに中央の争いである豊臣氏と徳川氏の対立にも巻き込まれていくことになった。後の豊臣氏と後北条氏の争いの際には戦場となっただけではなく、交渉の条件としても扱われるなど、上野国は混迷をきわめていた。この状況を生き残るため、真田氏は前述のように帰属先を変える、室賀氏を討伐するなどあらゆる手段を講じた。これは他の上野国地衆も同様であり、この混迷を生き残るための帰属先など重大な選択を数多く行っていた。

しかし、未だ地衆については互いの関係や細かい動向について把握しきれていない部分も多いので、より研究を深めていきたい。

そして『加沢記』については、豊臣秀吉との外交や徳川氏・後北条氏との対立といった他大名との関係に関して、自治体史の記述や『信濃史料』『戦国遺文』など文書集と同じものが多く、信頼性の高いものであると考えられる。

しかし、一門・家臣の統制については、『加沢記』の他では多くを見つけることができなかった。一門・家臣の変遷については後の時代の知行宛行からの検討や、さらに新出史料を探すことを今後の課題としたい。

(とみざわ かずひろ・本学経済学部教授／

さとう ゆうた・本学大学院経済・経営研究科博士後期課程)

【主要参考文献】

- 上田市誌編さん委員会『真田氏と上田城』（上田市、平成14年10月）
群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』（東洋諸林、平成元年3月）
群馬県史編さん委員会編『群馬県史』通史編3中世（群馬県、平成元年12月）
群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編7中世3（群馬県、昭和61年3月）
子持村誌編さん室『子持村誌』上巻（子持村、昭和62年3月）
信濃史料刊行會『信濃史料』第14巻（信濃史料刊行會、昭和34年12月）
信濃史料刊行會『信濃史料』第15巻（信濃史料刊行會、昭和35年10月）
信濃史料刊行會『信濃史料』第16巻（信濃史料刊行會、昭和36年3月）
信濃史料刊行會『信濃史料』第17巻（信濃史料刊行會、昭和36年12月）
柴辻俊六・黒田基樹編『戦國遺文』武田氏編4巻（東京堂出版、平成15年9月）
柴辻俊六・黒田基樹編『戦國遺文』武田氏編5巻（東京堂出版、平成16年4月）
杉山博・下山治久編『戦國遺文』後北条氏編3巻（東京堂出版、平成3年9月）
杉山博・下山治久編『戦國遺文』後北条氏編4巻（東京堂出版、平成4年9月）
杉山博・下山治久編『戦國遺文』後北条氏編5巻（東京堂出版、平成5年7月）
高橋義彦『越佐史料』巻6（名著出版、昭和46年11月）
高崎市史編さん委員会 新編『高崎市史』通史編2中世（高崎市、平成12年3月）
高崎市史編さん委員会 新編『高崎市史』資料編4中世Ⅱ（高崎市、平成6年3月）
新潟県『新潟県史』通史編2中世（新潟県、昭和62年3月）
新潟県『新潟県史』資料編5中世3文書編Ⅲ（新潟県、昭和59年3月）
沼田市史編さん委員会『沼田市史』通史編Ⅰ原始古代・中世（沼田市、平成12年3月）
沼田市史編さん委員会『沼田市史』資料編Ⅰ原始古代・中世（沼田市、平成7年3月）
『沼田市史』資料編1別冊『加沢記・沼田根元記』（沼田市、平成7年3月）
山崎一・山口武夫編『吾妻郡城壘史』（西毛新聞社、昭和47年3月）
山崎一『群馬県古城壘址の研究』上巻（群馬県文化事業振興会、昭和53年10月）
山崎一『群馬県古城壘址の研究』下巻（群馬県文化事業振興会、昭和53年10月）